

小児脳波における正中部導出の有用性

◎諸井 ひろみ¹⁾、小林 昌弘¹⁾、松下 陽子¹⁾、北川 孝道¹⁾、嶋田 昌司¹⁾、松尾 収二¹⁾
公益財団法人 天理よろづ相談所病院¹⁾

[背景]小児の脳波検査において、正中部（Fz,Cz,Pz）にほぼ限局する、最大振幅を示す Midline spikes（MS）を認めることがある。従来当院では、小児科依頼の脳波検査において正中部導出は実施していなかったが、小児科からの要望により正中部導出を行うこととなった。今回、小児科依頼の脳波を判読し、正中部導出の有用性について検討した。

[対象]当院において、2015年9月1日から2018年3月31日の期間に小児科から依頼され脳波検査を実施した409名、延べ1106症例とした。

[方法]脳波波形を判読し、正中部導出でのみMSの検出が可能であった症例数を調査した。また、てんかんにおけるMSの臨床的意義について調査するため、MSのみを異常所見とする患者を抽出し、脳波判読およびカルテ検索を行った。

[結果および考察]MSが他の導出部に波及せず、正中部導出でのみ検出が可能であったのは、1106例中24例（15名）、2.2%であった。

またMSを認める患者の中で、初回の脳波検査から

2018年3月31日までの経過観察の間に他の異常を有さず、MSのみを異常所見とする患者は11名であった。その11名の脳波でのspikeはCz優位またはPz優位に認め、Fzには認めなかった。また、MSは2名が覚醒時から出現し、睡眠時に頻度が増した。その他9名は睡眠時に出現した。さらに、2名においては経過観察中にMSの消失を認めた。カルテ検索では、全員が痙攣症状を有し、熱性痙攣4名、部分発作4名、全般発作1名、その他2名であった。発達および画像所見はすべて正常であった。これらの結果は既報とほぼ同様の結果であった。過去の文献によると、MSは発達異常が軽度にとどまり、画像所見では異常を示す割合が少ない。また、思春期までに消失することが多いことから、年齢依存性をもつ特発性の小児良性てんかんと関連があると報告されており、MSは小児てんかんの中でも比較的良性の所見であると考えられている。

[結語]小児科依頼の脳波検査において、正中部導出は異常検出感度を2.2%上昇させ、小児てんかんの診断に有用である。
連絡先：0743-63-5611（内線7445）